

Living My Dream Life

in ふじのくに

誰もが夢を実現できる
静岡県



岐阜県飛騨市古川町の浴衣イベント「色和衣」にて。心を込めて茶を淹れる。



富士市の茶園の中の茶畑。アルバイトに励みながら茶を学ぶ。



「遠州の小京都」森町に現存する、古い蔵を活用して開く交流カフェイベント時の姿。

「自分にとってのお茶は、人とつながる窓口のようなもの。ここでお茶を飲むと、皆さんいろんな思い出話をしてくれるんです。お茶は、最も日本人の思い出を引き出せる飲み物。だから、ワクワクした思い出や、感動した心の動きを拾うことに価値があると思います。交流カフェをやっています」。凛々しい表情が印象的な神崎悠輔さんが紡ぎ出す言葉には、茶人らしい奥深さが漂う。森町の地域おこし協力隊員として古い蔵で週1回営むカフェは、特に地元の年配者たちの大切な居場所の一つになっている。

千葉県出身の神崎さんは、大学で出会った茶道に魅了され、茶人として生きることを決意。茶の奥深さを見極めるために茶畑で働いたり、名門ホテルで抹茶を点てたりして各地を巡り、2018年に森町へやって来た。

「森町が魅力的なのは、「ここは本当にいい町だ」と思う人がたくさんいるから。昔栄えた町並みが今も数多く残っているのは、それが理由だと感じます」。

カフェや茶のイベントで町の魅力を発信する一方、古民家を改修し、民泊や短期移住者がシェアハウスとして使えるようなゲストハウスづくりにも取り組む。「これからは多拠点居住の時代だと思います。私も森町に本拠を置きながら、世界で仕事をしてみたい」。社会的に地方移住への関心が高まる中、神崎さんは第2の故郷・森町を軸に、新しい暮らしの形を提案していく。

この魅力は、
自分の町はいい町だと思っている人が
たくさんいること。



茶人・森町地域おこし協力隊

かん ぎき ゆう すけ

神崎 悠輔さん

千葉市生まれ。成蹊大学時代に先輩に誘われて茶道部へ入り、茶道宗徧流正伝庵に師事。「15歳で母親を亡くしてから、『生きている間は好きなことをやるしかない』という思いが強くなった」と、大学卒業後より茶人として活動を始める。鳥羽グランドホテルでの点茶や、三重・愛知・静岡の茶メーカーと農家を回って修業を積み、2018年9月に森町地域おこし協力隊に着任。森町茶文化工房代表として、同町の魅力を全国へ発信している。